
去りゆく旅人は二度口笛を吹く

神田美優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

去りゆく旅人は二度口笛を吹く

【Nコード】

N5309Z

【作者名】

神田美優

【あらすじ】

高校1年生の夏、友人と2人鈍行列車を乗り継ぎ大旅行に出かけます。

そこで起きる珍道中、人々との出会いと別れ、そして淡い恋心…？
広島県と岩手県というかけ離れた2つの地で繰り広げられる人情あふれる旅行記を書き綴っていききたいと思います。

初投稿作品なので稚拙な文章が目立つと思いますが、温かい目で見

守ってくださいと幸いです。

序章。きつかけはいつも唐突に

「旅行に、行きませんか？」

高校1年も数ヶ月を過ぎ、そろそろお盆も終わりに差し掛かるある日のことだった。中学の頃と同級生であり、仲が良かった古泉という男からそんなメールが届いた。詳しく聞いてみると広島と岩手に列車を乗継ぎ数日かけて行きたいそうだ。やれやれ、なんと無茶な話だろう。昔から旅行は好きであったがこんなに長距離を移動するのははじめてのことだ。しかし始まったばかりの高校生活に不慣れであった俺は特に予定もなく、昔なじみと出かけるのも悪く無いだろうと思い二つ返事で了承した。こうして夏の終わりに、俺たちは旅にでたのである。

お盆も終わり夏休みも終盤に差し掛かった8月某日、朝5時を過ぎた頃。俺はいつもの黒い中折れ帽子に夏物のジャケットを羽織り、茶色い鞆一つという身軽さで地元の駅の改札で古泉を待っていた。（親父臭い格好とは言わないでほしい。）旅行に行くのにそんなに荷物はいらぬ。着替えと洗面具、あとは身分証と金さえあればなんとかなるものだ。重く多すぎる荷物は列車を乗り継いでいく旅には向いていないし、俺自身もごちゃごちゃと持っていくのは嫌いだ。傍を通勤する人ごみが電車が到着するたびに俺の横を忙しなく通り過ぎる。皆、仕事のことしか頭に無いようだ。

「狭い日本、そんなに急いでどこに行く…か。」

そんなことを考えていたら通路の向こうから古泉が歩いてくるのが見えた。

「おはようございます。おまたせしまして申し訳ございません。。

古泉がそんな堅苦しい挨拶をしてきた。

この古泉という男はかなり変わった男だ。なんせ、同い年である俺にさえ敬語を使う筋金入りの礼儀正しさを持ち合わせているからだ。16の高校生らしい幼さはなく、妙に大人びている。まあ、それを言うなら俺もかなり親父臭い性格だがな。中肉中背で顔も多少幼さを残す古泉は、Tシャツにジーンズ、キャップという普通の若者らしい格好をしていた。それでもってあんな性格である。見た目のギャップが激すぎるだろう。

「まもなく、2番線に電車が参ります。白線の内側にてお待ちください。」

不意にそんなアナウンスが駅の構内に響いた。俺らが乗る予定の電車だ。この時間帯は電車に乗ることが無いので混み具合がわからないので早めに乗って席に座りたかった。

「挨拶は後だ。古泉、急ぐぞ。」

俺はそう声を掛けホームへの階段を降りだす。

「かしこまりました。」

と、後ろから古泉の返事が聞こえた。まったく、つくづく礼儀正しい男だ。

第一章。香りのよいお茶を楽しみながら列車は熱海を目指す。

東京に向かう鈍行列車に乗り込み、明け方の故郷を後にした。数日間ではあるが、しばしの別れである。運良くふたり並んで座れたため、乗換駅まではのんびりと過ごせそうだった。

「こうやって会うのも久しぶりですね。」

唐突に古泉がそんなことを言ってくる。確かに、中学卒業以来メールのやり取りはあったが実際に合うことはなかった。

「だな。お前も相変わらずかわらないな。いんちき臭い敬語つかつて。」

古泉はフツと鼻で笑うと、嬉しそうに言った。

「敬語は僕のアイデンティティですよ。」

きつとこいつは、大人になって酒を飲み交わす仲になっても敬語なんだろう。そう思うと俺も笑みがこぼれてきた。

そんなふうには愛もない雑談をしながら俺たちは東京へ向かった。

朝の7時を過ぎる頃、品川に到着した。売店に寄りお茶とおにぎりを2つほど購入し、東海道本線で熱海へ向かう列車の中で食べる朝食である。熱海につくまで1時間半以上あるのでゆっくりと食べられそうだ。

鮭とおかかのおにぎりを、東京の高層ビルが立ち並ぶ雑多な風景を眺めつつ味わう。ペットボトルの緑茶はお気に入りの銘柄。口の中に広がったおにぎりの味をさっぱりと締めくれるいいお茶だ。古泉は家で食べてきたらしく、俺がおにぎりを頼張っている間、うとうと船を漕いで眠そうにしていた。朝は弱い奴だったな、たしか。しばらく見ていたらすやすやと眠りにつきはじめた。旅はまだ長いんだ。起こさないように静かにすることにしよう。

朝食は終わったが、熱海につくまであと30分ほど時間があつた。車窓からの風景は次第に自然が増えていき、都会の喧騒はもうなか

った。

「さて、本でも読むかな。」

このまま景色を眺めているのも良かったが、今は眠気を飛ばすのに頭を使いたかった。このまま2人で眠ってしまつては大変だ。俺は鞆の中から文庫本を取り出して読み始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5309z/>

去りゆく旅人は二度口笛を吹く

2011年12月21日01時46分発行